
春の特別写真集

流羽奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春の特別写真集

【Nコード】

N5327G

【作者名】

流羽奈

【あらすじ】

春の特別写真集。 渋々集まった恋次、白哉、日番谷、ギンの四人は、女性死神協会の罠にはめられて行く。 どたばた死神コメディ！。

プロローグ

ある晴れた春の日。

冬の間に女性死神協会によって立てられたある企画が行われた。そう。それは男にとって、まさに屈辱としか言いようがない。参加は強制。それも、美男子ばかり。

写真集がミリオン越えをしている男ばかりを集めていたのだ。

——何か、ある。

集められた男達は全員、顔には出さないが、一人残らずそう思う。

「今日皆さんを呼んだのはある写真集を出す為です！」

そらきた。

とでも言うように赤髪の死神、阿散井恋次がため息をついた。

「はいそこ！ため息をつかない！」

ビシッと乱菊に指を指され、恋次は慌てて表情をきりりと引き締める。

しかし、この状況でどう表情を変えずに居ろというのか。

すぐ隣に居る自分の隊長、朽木白哉を見やった。

眉一つ動かさないその表情は、男としての凛々しさを感じる。まさに、恋次にとっての「尊敬」そのものなのだ。

「それじゃ、皆さん、存分に楽しんでくださいっ」

その黄色い声に、日番谷冬獅郎が少し表情を変えた。そして、口元が「まずいな」というように動く。

日番谷と乱菊は長年の付き合いだ。

その声で、表情で。

互いに何を考えているのか、あらかた想像できるのであろう。今の乱菊…いや、女性死神協会は明らかに、何か変なことを考えている。

「おい松本。楽しむって何だ、楽しむって」

我慢できずに、日番谷が口を開いた。

聞いたのは日番谷だが、ここに招集された男死神は全員、そこ答えを心待ちにしている。

乱菊がもったいぶったようにしばらく全員に背を向け、そして、やっと振り向く。

「ヒ・ミ・ツ」

うふふ、と不敵な笑みを浮かべてそう言う乱菊に、全員の心に一層「警戒心」が出来たのだった。

「じゃあ皆さんっ！写真撮影をします！」

ピンクの髪元氣よく跳ねさせた草鹿やちるが、召集された死神にそう言った。

「撮影？ただ単に撮るだけなら、全員を集める必要ないんとちゃうん？」

銀髪、紅蓮の目を持った死神、市丸ギンが、独特の言葉でやちるに聞いた。

「ただ単に撮るんだったら集めないよー！」

元気な声が、より一層、警戒心を強めさせた。
人一倍警戒心が強い日番谷と白哉は元居た場所から二、三步後ろに下がっていた。
それに習ってか、恋次も少し遅れて後ろに下がる。
そう。

この三人（？）の予想は見事に当たっていた。
次のやちるの言葉によって、集められていた恋次、白哉、日番谷、ギン、の計四人は一斉に地面を蹴り上げ、瞬歩で逃げる羽目になる。

「女の子の格好をしてもらいます！」

一瞬のうちに風がやちるの前を流れすぎていき、次の瞬間にはもう何も居なかった。

霊圧は、すでもう小さくなっている。

どれほどの速さで移動したのか。そう考えさせられるほどだった。

「あらら……。逃げちゃった……」

「ま、当然よね」

その呆然とした言葉に、乱菊が蜂蜜色の髪をすこし指でなぞりながら相槌を打った。

やちるは風が流れて行った方向をそれぞれ数秒眺めてから、後ろを向いて、「集合！」と声をかけた。

疾風の如く現れたのは、この事を想定して集められていたメンバーだろう。

ルキア、夜一、雛森の三人だった。

三人は自身の漆黒の髪を風になびかせながら、やちるの方を見る。

「それじゃ、各自、自分の標的を追ってね！捕まえ次第、ここに連

れてきて！」

やちるのその明るい呼びかけに、ルキアが、

「分かりました、草鹿副隊長」

丁寧に返事を返してその場を瞬歩で消えた。氷雪系の斬魂刀を持ったルキアは、席官以上の腕前を持つ。その冷静な判断と、得意の縛道で今回、この仕事を任されたのだった。

夜一が、

「楽しみじゃな。儂の瞬歩に敵う者は居はせぬぞ」

と不敵な笑みを浮かべ、疾風雷神の勢いでその場を駆けて行った。風が一気に強くなって、その勢いでその場に生えていた草が幾つか抜けていった。夜一と言えば、四楓院家の当主で、「瞬神夜一」との別名を持つ。普通の死神なら数秒も経たないうちに捕らえられてしまうだろう。

「あたしも行つてきます」

最後、残された雛森は少し遠慮しながらそう言った。踏み込んで、前に踏み出す。華奢な容姿・格好をしながら炎熱系の斬魂刀を持っている上に鬼道の達人だというのだから、その実力はかなりのもの。隊長格なら捕らえることは容易だ。

「はあ…あたしも行つてこようかなあ…」

少し伸びをして、乱菊が一息つく。少し面倒くさそうに辺りを観察し、ある方向で動きを止めた。

「…こつちね。それじゃ、やちる。行ってくるわ」
「いつてらっしゃーい」

元気よく手を振るやちるは、乱菊の姿が見えなくなったのを確認すると、その場にゴロンと寝転がり、春の暖かい陽射しを身体に感じながらすう…と眠りに付いた。

敵に回した罰

「まったく…冗談じゃねえぞ…！ 何がコスプレだ…！」

恋次は赤い髪を風に流しながら地面を蹴っていた。風が、耳を擦る。

「よっし…ここら辺まで来りゃあ大丈夫…だな」

辺りを見回して、誰も居ない事を確認すると、安心したようにほう、と息を吐いた。心にたまっていた事が、一気に脳に入り込んでくる。それはあまりに多大な量であり、周りの音と景色が途切れた。

そもそも、何で俺が集められなきゃならねえんだっ！？ 俺以外にも檜佐木先輩とか浮竹隊長とか居るじゃねーか！ ミリオン越え？

そんなん、隊長だったらほとんど超えてんだろ！ 何で俺なんだよっ！ あれか、長髪なのがいけねえのか！？ コスプレには丁度いいのか！？ だったら尚更浮竹隊長だっていいじゃねえか！

愚痴もそこそこに、今までに無いくらいに深くて長いため息をついた恋次は、不意に、背後で小さく聞こえた声を捕らえた。一気に身を緊張させ、その声に耳を澄ます。聞いたことのある、耳慣れた声。そして、その声はこんな事を言っているように聞こえる。

「雷鳴の馬車・糸車の間隙・光もて此を六に別つ」

——ん？この詠唱は…まさか…。

鬼道が不得意な恋次と言えど、これが何の鬼道か、くらいは理解できる。

「縛道の六十一…六杖光牢！」

凜とした声が、恋次の周囲に伝う。恋次は声と同時にその場を飛び退いて、上空に飛び出た。声の主を探そうと、下を見下ろしたその瞬間。

「縛道の四、這縄っ！」

にゅつと黄色い縄が地面から伸びてくる。普通なら、容易に避けられるのだが、その声を改めて聞いて、動揺し、身体が動かない。理由は何にせよ、とにかく初動が遅れた。簡単に片足に縄が絡まりついた。

「っー！」

そのままの凄い勢いで地面に引つ張られる。地面が、どんどん近づいてきた。正直、怖い。

「うわっ！？ バカ野郎っ！！ やめろおおっ！！！」

恋次の叫びも虚しく、辺りにはやけに間の抜けた衝突音が響いた。

「つうあっ…！」

背は腹に変えられぬ。反射的に背中を抜ける形となって衝突した恋次は、後頭部を押さえながら、少し切った腕を眺めていた。

「おお、すまん。うっかり！」

やけに楽しそうな声が恋次の鼓膜を揺すった。ものすごい勢いで振り返ってみると、案の定。ルキアがそこに居た。

ルキアは、這縄の端をしつかりと持っていて、恋次は確実に捕らえられていた。

「待て、ルキア！ここは少し落ち着いて……！」

「何を言っておるのだ。私は十分に落ち着いておる。興奮しているのは貴様だけだ」

恋次は足に絡みついた縄をほどこうと、必死だった。ルキアの鬼道だ。並みの死神のそれとは全く違うことは分かっている。斬魂刀では鬼道を切る事が出来ない。術を行った者が解かなければ、それを解く術は無い。力づくで、抜ける以外には。ただ、その際には体力の消耗を覚悟、更にはかなりの激痛を伴う。ただ――。

「理解できたか、恋次？ 女性死神協会を敵に回さぬ方が良い、と言っ事を」

こんなに威圧を感じるルキアは初めてだ。今の状態のルキアの鬼道を自力で解いたとしても、必ずすぐ捕まるだろう。そんなことが容易に察知できた。

「…へっ…」

口元に笑みを浮かべて立ち上がった。そして、全てを吐き出すように息を吐いて、吸う。

「男は度胸だっ！ コスプレだろーがなんだろーがやってやる！」

もうやけくそだった。いや、それ以外に道が無かった、と言う方が正しいのかもしれない。恋次の視界の端に、ルキアが面白そうに笑っているのが見えた。

また同時刻。

夜のまばゆいほどの金色の瞳が、一人の死神を捉えていた…。

妹弱愛説

森の中。木が風にそよぐ音が、心地よい。そんな気分も、奴にかかれば一気に曇るのだ。今の、白哉のように。

「白哉坊！ 久しぶりじゃのう」

いきなり全面からぬつと出てきた夜一に、白哉は全く顔色を変えずに、ただ視線を向けるだけだった。

視線だけで、犬は殺せる。

それほどの殺気がこもっているのは一目瞭然だ。その殺気は今回の事だけではなく、幼少時代の様々な嫌がらせによるものも含まれているのだろう。しかし、今は白哉も朽木家当主。こんな事にいちいちまっつてなどいられないのだ。器用に後ろを向きながら走る夜一は、そんな白夜の事はお構いなし。

「…」

「なんじゃ？ やけに無愛想じゃの」

白哉とは裏腹に、陽気な声で話しかける夜一は、白夜にとってはかなり不愉快だっただろう。

「お主、こすぶれ、とやらの興味は無いのか？」

「貴様らを相手にしているほど、私は暇ではない」

夜一の質問を切って捨てる。そして、瞬歩のスピードを一気に速めた。それを見た夜一は少し抜けたような顔をして、すぐに不敵笑み

を浮かべる。

「ほお…儂に敵うとも思っておるようじゃの…。朽木家VS四楓院家、夢の対決じゃ！」

身を翻すと、姿勢を低くして一気に木の幹を蹴り飛ばした。その漆黒の髪が風に流され、太陽に輝く。同じく、白哉の髪も。

「白哉坊。お主、髪紐はもう付けておらんのか？」

簡単に白哉に追いつくと、そのようなことを口にする。白哉が幼少だった頃によく悪戯で盗っていた髪紐。あの頃はまだ、白哉は今のよう冷静ではなかった。すぐに熱くなる、言うなら今の恋次のよう。そう思うと、恋次ももう少し経てばこのようになるのだろうか。隊長と副隊長の関係だ。性格が似てくる事もあるのかもしれない。いやしかし。十番隊の隊長と副隊長は長い付き合いだが、乱菊が真面目になるような兆候は見当たらない。隊長が不真面目になるような兆候も無い。となると、恋次がこのように冷静になる線は無いだろう。

「副隊長が付けておるんじゃ。おぬしももう一度付けたらどうじゃ？」

「…今すぐ私の視界から消えろ」

白夜も、いい加減限界なのかもしれない。それにも関わらず、夜一は話し続ける。

「そうじゃ！儂のを貸してやろうか？」

「失せろと言っている」

間髪いれずに、白哉がそう言った、夜一は「失せろとは言っとらんかった気がするのじゃが…。先は『消えろ』と言っておったぞ」と小声で訂正をした。そんな事を言っているうちに、夜一の視界から白哉が消えた。

「ふん…。まだまだじゃの」

詰まらなさそうに言って、更には。

「朽木家当主が女子に瞬歩で負けるとは…朽木家の未来が危ぶまれるの…」

既に見えなくなっていた白哉の霊圧をたどって、白哉の行方を追う。木の葉が交わる音、気が揺れる音。全ての音に耳を澄ます。

「鬼ごとは得意じゃぞ」

心の中で、蜂碎の方がやり応えがあるのかもしれない。そんな事を思いながら、スピードを速めた。

「お？」

地面を走っているとき、ルキアの霊圧を感じ、ぴた…と足を止めた。ルキアの霊圧の威圧さ、感じ。全てをとって、恋次を確保しただろうことが簡単に感じ取れた。

「いかんいかん。若者に遅れをとっておるの。儂もそろそろ本気を出すときじゃ」

今までに無いほどに力を足にこめて、勢いよく地面を蹴った。土煙

が舞い、辺りの木が揺れる。細い幹は折れていくほどの風の強さである。それだけ、本人の速さは凄いのだろう。

その速さは、白哉よりも速いことは確実である。白哉との距離は徐々に縮まっていた。やがて、白哉の背中にわずが一メートルまで迫って行ったとき、夜一は不意に口を開く。

「ルキアがお主のこすぶれを見たがっておるぞ」

その言葉に一瞬、白哉が動きを止めた。その瞬間を見逃さなかった夜一は、白哉の襟巻きを掴み、白哉を捕らえた。

…かに見えた。白哉は一瞬にして襟巻きから抜け出して、その場に立っていた。夜一が一步でも動けば、すぐに逃げ出すような算段は出来ている。一方、夜一は地面に肩膝を付いて、その襟巻きを眺める。そして、それをひら…と手放した。

「どうしたのじゃ？逃げんのか？」

腕を組んで、その場に立ち上がる。不思議に思っただけで白哉の前方を見ていると、ルキアに捕まっている恋次が二人で歩いているのがぼんやりと見えた。

「あ、兄様！」

その声に、白哉の身体がピクリと反応する。

「ほう…」

どうやら、白哉の妹弱愛説は本当らしい事を夜一は確信したのであった。夜一はルキアを白哉の後ろから手招きをして呼び出し、アイサインで白哉をどうにかするように頼み込んだ。ルキアはそれをす

ぐに察し、小さく頷いた。

「に…兄様…。私、恐れながら兄様のコスプレ姿を拝見、させて頂きたいと…。いえ、兄様が嫌なら何もムリに頼んでいる訳ではありません。ただ…私は一度でもいいから兄様のコスプレ姿が…」

演技が異常に上手い。少し目を潤ませながら、白哉を見ている。いい感じの上目遣いだ。夜一はその光景を必死に笑いをこらえながら見ていた。

そしてその後すぐ、白哉が首を縦に振ったのは言うまでも無い。

繋がれた手

流魂街のとある建物の屋根の上。

日番谷は一人、その場に片膝を立てて座り込んでいた。風が流れる方向から、色々な霊圧が感じ取れる。

「阿散井と朽木はなにやってんだ…」

朽木、とは恐らく白哉の事を指しているのだろう。はあ…とため息をついて、片手で顔を覆うように俯いた。

「だらしのねえ…。なあ、お前もそう思うだろ？」

キツと後ろを肩越しに振り返って、そう言った。その先にはただただ森が広がっているばかりだ。

「…雛森」

日番谷がそう言うと、たくさんある木の中からガサツと音が鳴り、一人の死神が姿を現した。恐る恐る日番谷の方に歩み寄ってくるのは確実に、日番谷はスツと立ち上がり、腕を組んだ。

「えへへ…ばれてた？」

「ばれてたも何も、最初からお前が追ってきてたのは気付いてたかな」

世間話をしているような空気だが、二人の間には何とも微妙なぴりぴりした視線が交じり合っていた。何かを基準にしたかのように、二人が同時に上空へ飛び立って行く。

「お前も、俺を捕らえる気か？」

「ええ。日番谷くんのコスプレ姿、見てみたいから」

鼻でフツと笑い、日番谷は瞬歩で上空を駆けて行く。雛森も、それに付いて行くように追いかけた。ただ、その追いかけ方は「捕らえる」というよりかは「追いつく」と言ったほうが正しかった。

——鬼道の達人だからな…。気をつけねえと…。

日番谷は時折後ろを確認しながら、雲に紛れて移動する。視界が急に狭くなって、逃げるには絶好の環境であり、絶望の環境でもある。下手したら鉢合わせ…と言う事も有り得るのだ。

日番谷は足を止め、雛森の霊圧を探った。そして、舌打ちをする。

「霊圧、隠しきれてねえぞ」

雲の中からフツと飛び出し、下にある大きな森の中にそのままの凄いい速さで突っ込んで行った。雛森は上空からその日番谷の様子を見る。そして、掌を身体の前に掲げて日番谷めがけて鬼道を放った。

「赤火炮！」

凜としたその声を聞きつけ、日番谷はハッと後ろを振り返る。

——やべ…。

今、突っ込んで行っているのは森だ。赤火炮なんてぶち込まれたらただ事じゃすまない。

咄嗟に斬魂刀・氷輪丸を背中から引き抜き、赤火炮を止める。

日番谷の刀から漏れ出した霊圧で、たちまち赤火炮は蒸発して行く。このことから考えるに、炎熱系の斬魂刀・飛梅を持っている雛森にとっては分が悪いのだ。

「馬鹿野郎！ 雛森！ 今俺が止めなかったかどうなったか分かって…」

「雷吼炮！」

日番谷が話しているのにも関わらず、鬼道を打ち込んでいる雛森は、普段の華奢な彼女とは既に違っていた。明らかに、「戦士」としての風格はある。そして、その攻撃には決して殺意は無く、一種の「娯楽」としての攻撃だ。

「ちっ…」

苦々しく舌打ちをして、氷輪丸を背中の中鞘にしまい、片手を眼前に広げた。

「…雷吼炮」

鬼道の達人と言えど、雛森は副隊長だ。鬼道で遅れを取るようなら隊長としての顔が立たない。

案の定、雷吼炮はお互いの丁度間でぶつかり合い、大きな爆音と熱風を残して跡形も無く消え去った。

その熱風になびいている銀髪が、少し落ち着いた頃。

日番谷の視界から雛森が消えた。日番谷は一瞬ハッとする。それが、いけなかった。

「六杖光牢」

その声に反応した時にはもう遅かった。日番谷はすでに捕らえられていた。

「なっ…!!」

「日番谷くん、つつかまえた♪」

明るい笑顔を見せながら、六杖光牢にかかっている日番谷を優しい瞳で見つめる。

「自分の自慢の弟がコスプレするなんてなあ……」

「お前が言っな、馬鹿野郎……」

もうすべてを観念した声で、日番谷は呟いた。

それと同時に解かれた六杖光牢に日番谷は少し驚き、そして、すぐにまた捕らえられた事を実感する。

「じゃ、いこつ！シロちゃん！」

「…日番谷隊長だ」

しっかりと繋がれた手に、少し視線をやりながら、仕方なく手に引かれていった。

V S 十番隊

少し暗めの銀髪と、明るい金髪のコントラスト。それがやけに目をちかちかさせた。

「ねえ、ギン。何で逃げるのよ」

「何でて…そない聞かんでも分かるやろ」

乱菊の数歩前を、ギンが歩いていた。その距離は縮まる事も、広がる事も無かった。

微妙な距離を保ちながら、二人はいつものように話している。

「乱菊、何でボクをコスプレさせたいんや？」

「何で？ 理由なんて無いわよ」

実を言うと、理由はある。

ただ単に、お金を集める事。女性死神協会は、ただでさえ金遣いが荒い事で有名なのだが、その資金が底を付いた今、自分たちで資金をためようとしているのだ。

資金が無い…旅行が出来ない

その方程式は天地がひっくり返る事があっても、決して見たくはない。そんな欲望を心の底に住みつけている女性死神は、こうやってお金を稼ごうとしている。今の、乱菊のように。

まあ、女性死神協会のことを考えずに、面白み半分でこの事を行っているものも居るのだが。

「素直に捕まる気は無いのかしら？」

「あるわけないやん。コスプレなんかしたくないわ」

「そお？ 実を言うと興味があったりするんじゃないの？」

乱菊は何としてもギンを捕らえてコスプレをさせたいらしい。

何故かギンの写真集はやけに売れ行き好調。うちの隊長には及ばないけど。一番売れてるのはうちの隊長で、次が朽木隊長。それから浮竹隊長とかが来るけど、女装…コスプレには向いてないから飛ばして恋次とギンと来るのだ。

「あるわけないやろ」

そう言つて、スツと瞬歩で消えて行つた。ギンの瞬歩は、ただただ風が揺れたという風にしか取りようのないくらい、気配が感じられない。乱菊は唯一感じられるギンの霊圧を追いかけた。

「ギン！ 待ちなさい！」

ピンクのストールを肩にかけながら、漆黒の森へと潜り込む。

漆黒に、ぼう…と暗い銀色が目立つ。

「誰がそんな事言われて待つ思てんねん！ 待つぼうがおかしいやろ！」

後ろに振り返つて、珍しく覗いている紅蓮の瞳に乱菊は少し反応する。乱菊は自分の蒼色の目をその対照的な紅蓮の目にキツと視線を合わせた。

「そ。それなら力ずくで行くまでね」

凜とした、澄んだ瞳でギンを見つめ、スツと辺りを見回した。

「あら？ 他の人たちは捕まっちゃったみたいよ、ギン」

「それがどないしたん？　ボクには何の関係も…」

ギンが、少し後ろを振り返った、その刹那。

不意に、氷の香りがした。言わずと知れた、日番谷である。

ギンは突然の出来事に驚き、その場で足を止めた。

「どないしたん？…十番隊長さん」

「うるせえ。とにかく、大人しく捕まってもらうぜ」

——ほんの数分前。

雛森に捕らえられた日番谷は、少し後方の乱菊とギンの霊圧を感知し、反応を示した。

「俺と朽木と阿散井は捕まったんだよな…。となれば…」

今、日番谷の頭の中には普段は見せない幼稚な考えが浮かんでいた。恋次と白哉は恐らく既に自由に動ける状態ではないだろう。

今自由に動けるのは、日番谷だけである。

「必ず戻るから」という言葉を言い残して、雛森の元から瞬時に消えて、今のこの状態にあるのだ。

「一人だけ逃げ切るのは卑怯、だろ？」

「そんなん、捕まった十番隊長さんがあかんのやろ？」

二人の間は、十メートル程開いている。

それでも、二人の間には緊張感と、ほんの少しの殺気があった。乱菊が、その更に後ろで控えている。

「松本、そこから動くんじゃねえぞ」

乱菊を、翡翠が捕らえる。乱菊がこくと頷くと、日番谷は詠唱も無しに、掌をギンに向けた。

「六杖光牢」

ギンはすでに様々な戦場で見慣れたそれを、ひら…と音も無くかわすと、間髪入れずに次の鬼道が飛んでくる。

「鎖条鎖縛」

ヒュツと音を立ててもの凄い速さで飛んで行く鎖。日番谷の腕の微妙な角度によって、動く角度が少しずつ変わる。

その予測不可能な動きをする鎖を避けきるには鎖自体を切らなくてはならない。だが、刀剣解放の許可が出ていない今、無駄に暴れると霊圧を察知されて更に面倒な事になる可能性も考えられる。

鞘から抜いた、脇差。

刀剣解放をせずにその鎖を払ったところで日番谷の鬼道がびくともする訳もなく、そのまま木へと結び付けられてしまった。

「さあて…どうしてくれようか。…松本」

ギンの前に腕を組んで後ろに目をやった。乱菊に「動くな」と言ったのは、乱菊の傍にあった樹を目印にしたかったからだろう。

「ギン、アンタには…そうね。ミニスカートでもはいて猫耳でもつけてもらいましょうか」

「猫…」

「…耳？」

待て松本。てめえ一体どんなコスプレさせようとしてんだ。日番谷がそう言う前に、乱菊とギンは疾風の如く消えてしまった。気が付けば、隣には雛森がいる。

「おい雛森。お前ら一体何考えて…」

「いいからいいから！シロちゃんも行こ！」

「シロちゃんて呼ぶな…よっ!？」

日番谷の腕を取って、雛森はダンツと樹を蹴って乱菊たちの後を追って行った。

悲劇の始まり

「じゃ、全員集まりましたね♪」

乱菊がさも楽しそうにそう言う。その声で、後ろのほうで横になっていたやちるが跳ね起きた。

男子死神の心境は（白哉を除いて）乱菊と正反対だろう。どんよりとした暗いムードが漂っていた。

「服はあちらで用意しています。順に来て下さい」

ルキアが手で指した方向には雛森と夜一の姿。ニヤニヤと笑っている夜一と、おそらく男子死神が着る服でも目撃したのであるう雛森が、少し頬を赤く染めている。

「じゃあ最初は恋次から！写真はやちるが撮ってくれるから、嫌がらずに言われるがままに動いて頂戴ね♪」

乱菊の笑顔とその言葉には絶対に逆らえない「怖さ」があつた。上官である日番谷が苦笑いするほどに、幼馴染のギンが後ずさりするように。

「ちよっ…待て！いやあああああああ…」

…森の中に、虚しく恋次の叫び声がぼーんと響いた。やちるの高らかで無邪気な笑い声が聞こえる。その無邪気な笑い声が、やけに恐ろしく感じるのは今だけだろう。この騒動が終われば、その笑い声は素直に受け止める事が出来るのに…今は、どうしても出来なかつ

た。

立場が人を変えろとは、こういう事なのだろうか。

「おお！ 似合っておるぞ、恋次！」

夜一が気さくに話しかけた。恋次は頬を林檎のように真っ赤に染めながら、声の限りに叫ぶ。

「似合いたくねーよ！！ 何なんだこの格好！ スーサーすんぞ！
！ 大体こんなモン、どつから貰ってきた！？」

「石田が作ってくれたぞ！」

ルキアがはっはっは、と笑いながら夜一に負けず劣らず気さくに話しかけた。「石田ア！？」と恋次が訊き返すと、

「石田の奴…嬉しそうに作っていたぞ。女物作るのだけは得意だからな、あいつは」

「…あの野郎…ッ！」

Sだ！あの野郎…絶対Sだ…ッ！！恋次が近くにあつた木を思いつきり叩いて、鳥が飛び立つ。同時に、その木からやちるが飛び降りてきた。

「はいっ、チーズ！」

突然の出来事。フラッシュがいきなりたかれ、パシャツと音が鳴った。

普段、剣八の背中に乗っていてその事は明るみに出では居ないが、やちるの素早さは天下一品。その小柄な体系を生かして、疾風の如く野山を駆け抜けるのだ。

「ナイスです！ 草鹿副隊長！」

「えへへー」

やちるが微笑んでいるのを恋次は悪魔を見るかのようにただただ果然と眺めていた。

「…阿散井の悲鳴が聞こえてから…数回草鹿の甲高え笑い声が聞こえたな…」

「どんな格好カッコさせられてんのやろ、副隊長サン…」

日番谷とギンが話していると、乱菊がビシッと指を指して指摘する。

「ほらそこ！喋ってないでさっさと行く！」

「行くゆうても…六番隊長サンは…」

「もう行つたわよ」

…乱菊が視線を送った先には、白哉が優雅にやちるの方へ歩み寄っている姿があった。日番谷たちは思う。

——何なんだ、あの澄ました顔はあつ！？　こんな異常事態によくもあんな…ッ！

「朽木の演技力って大したものねえ…」

乱菊がそう言ったのにも、二人は気付かなかった。

「さあ、どっちから行く？」

その視線は物を凍らすかのように冷たく、物を燃やすかのごとく熱

い、何とも言えない恐ろしい視線だった。いや、乱菊からしたら興奮した目なのだろうけれど、二人にとってはそう見えるのだ。

「仕方ねえ、俺から行くぜ。市丸、てめえは最後のとおきとしてそこに残るときな」

この時の日番谷の翡翠の目は、今までに無いくらい冷たい目だった。これこそ、生命の危機がある目だろう。ギンはその場から動く事が出来なかった。

発売間近

「…てめえら…なんて格好してんだ…」

日番谷が呆れるのも無理は無い。

恋次は女物の制服、赤いリボンが付いていて、恐らく一護達に通っている高校の制服であろう物を着ていた。スカートがやけに短いのは、気のせいと言う事で捕らえておく。

一方、白哉は長い髪を束ねられ、お団子状にしてある。髪がお団子、つまり…それに見合う格好はチャイナ服である。赤色と青色の二種類が合ったように、赤色のチャイナ服が乱暴に木の傍に投げ捨ててあった。チャイナ服の切れ目が、ホントに見えるか見えないか位スレスレで、女が着たらそこらの男児が食いつきそうなほどである。

「俺だって好きでこんな格好してるわけじゃないっスよ!!」

「恋次…いい加減慣れたらどうだ」

恋次が顔を真つ赤にしながら叫び散らすその傍らで、やや呆れたようにルキアがそう言っている。恋次と違い、白哉はただその場にジツとして、凜とした眼差しで辺りを見ているのだった。恐らく、何をしようと、どう足掻こうと逃げる事が出来ない事をもう理解しているのだろう。

「…で? 俺に何を着ると?」

「あ、こっち来て、日番谷くん!」

雛森のやけに明るい声に、少し疑心を抱きながら、日番谷は雛森が手招きする方へ向かった。

「そろそろかしら？ ギン、付いて来なさい」

「何でボクが命令されとんの」

「いいから」

やけに気合の入った声に、ギンは口答えが出来なくなる。言われるがままに付いて行き、その場で見た風景に絶句した。

「あら。全員、意外に似合ってるんじゃない？」

「乱菊さん…もう俺、写真撮られたんスから逃げ…帰ったって良いじゃないスか」

「ダメよ！ 最後は全員で写真を撮るんだから！」

乱菊がそう言っている間に、ギンは他の女性死神によって半ば強引に茂みの中へと押し込められる。その瞬間に、かなり嫌な感じが背筋を走って行った。

「雛森、二人の服は着せられたあ？」

「はい！」

満足感に満ち溢れたその声を合図にしたかのように茂みから日番谷とギンが出てくる。

「ギン、アンタ何、その格好！」

瞬間的に乱菊がそう言ってお腹を抱える。そして、甲高い笑い声が森を駆け巡った。

その格好は、ナース服。それに聴診器をつけて、更には猫耳をつけている。ちなみに、ナース服は薄いピンクで、これもやけに短いと

いうのは気のせい、ということと捕らえておく。ギンの場合、ナース帽の変わりに猫耳をつけた、と言ったところだろうか。ギンの怪しげな笑みが、その不自然すぎる格好を更に怪しいものとさせた。

「乱菊さん、日番谷くんが意外に似合ってるんですよ！」

雛森の声で、全員の視線が日番谷に向いた。日番谷は一気にそっぽを向く。

格好としては、中では一番まとも。…というべきなのだろうか。

「あのな、こんなん似合って何になるんだよ！ ウェディングドレスって！！ 誰だ、こんなんチョイスしやがったやつ！！」

「はい、あたしでえす」

乱菊が元気よく手を挙げた。その顔は本当に喜んでいるようで、かなりの笑顔だった。カッコよく言うなら、ヒマワリのように明るい笑顔、と言っべきだろうか。

「はい、ひつつーの写真も撮ったよー」

いつの間にかシャッターを押していたのか、やちるが乱菊にカメラを渡していた。

「草鹿！ てめ…いつの間に…！」

日番谷の文句が言い終わる前に、乱菊が手をパンパンと叩く。その音で、日番谷はすっかり口をつぐんでしまった。それが悪かった。乱菊から、こんな事を言われようとは。

「じゃーみんな並んでー。さっさと動きなさい、この変体共」

その言葉で、辺りが一瞬にして静かになる。草の一本一本の音が分かるほどに。

場の空気が凍りついた、と言うのはこう言う事なのだろう。

——いや、実際に凍り付いているのだ。

日番谷の腸はそりゃあ煮えくり返っている事だろう。霊圧が無意識のうちに跳ね上がっているのかもしれない。

そして、もう一つの理由。乱菊の言葉にイラツと来て、反射的に取り上げられた斬魂刀を取りに行こうとした恋次をとめるためにルキアが放った霊圧の効果もある。

二人とも斬魂刀が氷雪系なので、空気が凍ってもおかしくは無い。

「…松本…てめえ…後で覚えとけよ…」

ぴくぴくと動いている顔の筋肉の動きが、まさに「限界」を表していた。

ここで自分を抑えているのは隊長としての面子があるからだろう。ただ、握りこぶしにかなりの力がこもっているのは遠目から見ても分かるほどだった。

写真集販売まで、あとわずかである。

初版

「ねえねえ知ってる？ 今度の写真集、あの四人がコスプレしてるヤツらしいわよ！」

「あー知ってる！ 絶対初版買っわ、あたし！」

そんな会話が当然のようにされるようになったのは、発売開始のおよそ一週間前。その話を耳にするたび、乱菊は情けない笑いを我慢せずにはいらなかった。

これだけ噂が流れていると言う事は、それだけ買ってくれる人がいる。それだけお金が入る、と言う事だ。卑しい事が頭から離れない乱菊は、普段以上に仕事の進みが遅かった。

——それは、乱菊だけに留まらず。

女性死神協会のものは全員、どこか抜けているような笑みを時折見せるようになっていた。お金というものは恐ろしいものである。

「隊長、今日販売ですよ」

「あのなあ、あんなのが売れるわけねーだろーが」

ルンルン気分で乱菊が話しかけると、対照的に日番谷は詰まらなさそうに机に肘をついていた。一番まともな格好をしているとはいえ、あんな姿を大勢の目で見られると言うのは面白くない。まともな言っただって、ウェディングドレスだ。髪は丁度いい長さだった、と言うべきなのか、不幸にも丁度よくなってしまったと言うべきなのか……とにかく二つ結びだし、さらには頭に可愛い華なんかを付けている。更に、花のブーケなんかも持っているもんだから、ほかの

三人と比べたら余計な飾りが多すぎるのだ。

「…はあ…」

重苦しくため息をついた。発売三十分前である。

「隊長：発売、今日らしいつスよ」

「ルキアから聞いている。ルキアが真っ先に買うそうだ」

…そうか、そうまでして朽木隊長を敵に回さないようにしているのか。

恋次は瞬時にそう思う。

隊首室の窓から上手い具合に販売場所が見える。かなり大勢の女子が、群れている。確かに、最前列にルキアが居るような気がしなくもない。こんな大勢にあんな醜態を見られる事になるうとは。恋次のメンタル面はそろそろ限界である。あのように冊子になっただけでも嫌なのに、それを販売しようとは。もともと乗り気じゃないのだから、それはあまりにも不愉快だった。これ以上あの軍団を見ていると本当に立ち直れなくなりそうだったので、恋次は窓のカーテンを勢いよく閉めた。

販売十分前まで迫った。

「ギンー。そろそろ発売されるわよー」

「乱菊、話しかけんという」

ぐでつと机に突っ伏している所を見ると、恐らく落ち込んでいるのだろう。

乱菊は気さくに話しかける。

「何？ 珍しく落ち込んでるじゃない」

「乱菊んトコの隊長さんも落ち込んでるやろ。それと同じや^{おんな}」

「うちの隊長オ？ そんな大して落ち込んでないわよ。落ち込んでる、っていうか、怒りを超えて呆れてるに等しくなってるわ。今は雛森が相手してあげてると思うけど」

その返答にギンは啞然とした。そしてため息をつき、また机に突っ伏した。ナース姿に猫耳。合うのか、合わないのか。そう聞かれたら合わないのではないか。そもそも。隊長格ともあろうものがあんな格好をしていいのか。これで評判はどうなってしまうのだろう。そんな事を考えていると、机がめきめき言い始めた。それだけ顔を押し付けていたのだろう。

「アンタ、いい加減諦めなさいよ。ねちねちしてる男は嫌われるわよ」

「もうええわ。ボク、永遠とこうしてる…」

「吉良ア！ アンタ、こんな隊長によく付いていけるわね」

「え…いや…」

さっきまで全く絡まれなかったものだから、いきなり会話を振られても反応に困り、少し口ごもった。その様子に乱菊はため息をついて、「ここ、よく隊として成立してるわね…」呆れたように首に手を回し、かつたるそうに外へと出て行った。

販売まで、あと十秒。

「早く！もう良いじゃない！」

「だめです！あと五秒…」

そう七緒が言ってから、お客達全員がカウントダウンを始める。その覇気は、気の弱い男が思わず尻込みをするほど、だろう。七緒はそう思う。

「三！」

「二！！！」

「一！！！！！」

零を言わずにたくさんの死神が雪崩のように流れ込み、お金が投げ込まれる様に跳んできて、見る見るうちに写真集が減って行く。その様子は見ていて飽きないものだった。ほんの減り方が尋常ではない。わずか五分足らずで全ての本がなくなってしまった。七緒は、その様子に啞然とする。遅れてきた乱菊が、七緒に「あら？ 本はどうしたの？」と聞いた。無理もないだろう、カケラも本が無いんだから。そこにあるのは、たくさんのお金。乱菊が、その状況を飲み込むのは速かった。

「えっ！？ もう売れたの！？」

「ええ…。もの凄い速さでした…」

七緒が少し困惑気味の汗を流しながら眼鏡をくいつと人差し指で上げる。

「これで一気に黒字ですね。少しは財政も安定するんじゃないでしょうか」

「わーい！ お菓子お菓子いー！」

「それはやめて下さい」

きりつとした表情でそう言い放つと、ふう、とため息をつく。

「まだ買えていない人も居るはずです。もう一度発行しましょう」

その考えに、みんなが頷いた。

写真集・第二号

「はあっ！？ 待て、何でそうなるんだ！！」

その声が響いたのは、初版がもの凄い速さで売れて、販売が追いつかないほどに人気が上がった頃だった。

そう。

第二部を期待している女の子達が超急増してしまったのだ。

乱菊たちも、まさかココまで売れるとは予想もしていなかったので、正直驚いているところだった。

「第二部だったら他の奴らにやらせればいいだろ。何でまた俺たちがやんなきゃならねーんだ」

「俺たち？ 何言ってるんです、隊長？」

は？ と言うように日番谷は資料から目を放して乱菊のほうを見た。

「今回は、隊長にオファー来てるんです。何か、異常に可愛かったとか何とか……」

「ふざけんな！ 何で俺が可愛いなんて言われなきゃならねーんだ！！」

「あら、嫌ですか？」

「嫌に決まってるんだろ！ 男が可愛いって言われて喜ぶのは五歳までだ！！」

いいじゃないですか、外見は六歳とかその辺なんですから。その言葉を、乱菊は飲み込む。そして、パンツと机に手を置いた。

そして、顔を日番谷にグツと近づける。

「隊長、今の財政の酷さ、分かってますよね？ これはその為の事業なんですよ？」

「あのな、財政なんて俺にとつちや関係ねえんだよ。てめえら女性死神協会が馬鹿みたいに使っから金が無くなるんだ」

う…と、言い返す言葉がすぐには見つからなかったが、乱菊はそんなことにも構わずに、「と…とにかく！」と言葉を続けた。

「今は隊長だけが頼りなんですよ！ 隊長がやらないで誰がやるんですか！」

「誰もやなくていいだろーが！ 大体、何で俺ばかりこんな目に…」

くだらない事にムキになっている事に気が付いたのか、はあ、と息を吐いて、お茶を啜った。そして、コトリ、とそれを静かに置くと、ため息をついて、言い訳を口にした。

「男が女の格好して売れるなら女が男の格好すりゃあいだろうが」

咄嗟に出た何もかも無茶苦茶な言い訳だったが、こんな言い訳に、乱菊はハツと気付かされるものがあつた。

「…そうですね…それもいいかも！」

「…は!？」

「隊長、ありがとうございます！ それじゃ、まずは…」

一気に頭の中で計算をしたのか、音も無く隊首室を出て行ってしまった。

「…いいのか？ これで…」

乱菊が走って行ったあとの風に、日番谷の銀髪が揺れた。

「朽木ー！！」

「ま…松本副隊長？ どうしました？」

通りを歩いていたらルキアに、乱菊は声をかけた。驚くルキアをよそに強引に腕を引いて行った。
途中見つけた雛森と七緒を引きつれ、日番谷が言っていた事を口にする。

「そ…それは…」

ルキアが口ごもり、雛森に助けを求めるように視線を向ける。

「これって、男の人がコスプレするから反響があったんじゃないんですかね…？」

「そうですね、乱菊さんは事に焦りすぎです。日番谷隊長に言い包められたんじゃないですか？」

「そうかしら？ 意外に反響いいかもしれないわよ？ 何事も怖がつてちゃ前に進めないわ！ やるだけやってみるのも良いかと思うんだけど」

乱菊の気迫にどんどん押されていく。そして、とうとう三人は首を縦に振るしかなかった。

男の格好。

そう言われても、ピンと来るものは何も無かった。せめて、学ランがやっと出てきた程度。

今になって、乱菊は気がつく。

日番谷はこれを知っていて、乱菊にそう言い放ったのだ、と。

結局、女が男装をする、という話はおじちゃんになった。

これで全てが終わった…というわけではなかった。

「たーいーちよ」

「何だよ」

この上機嫌な声を聞いて、いい事があった試しは一度も無い。日番谷は苛付いた声で受け答えをした。

「まだ第二部は出ないのか、っていうクレームが多いんですよえ

」

「だから何だよ。俺は着ないからな」

筆が紙を滑る音だけがやけに目立っていた。

乱菊はその音に耳を傾けながら話を切り出す。

「そこで思ってたんですが」

「あ？」

「あたしが今まで撮ってた隊長の写真を本にしちゃおうかな？なんて」

「…何？」

日番谷の眉が、ピクリと跳ね上がった。

ピキ、と筆にひびが入った様な音が聞こえた気がするが、恐らく気のせいだろう。

「隊長のあんな写真とかこんな写真とか…」

取り出した写真を日番谷に見せびらかすようにして、乱菊は枚数を数える。

「いつの間にんなもん撮ってたんだよ!？」

バツと写真を奪い取り、顔を赤くする。机で寝ているものや、戦闘後の少し返り血を浴びたものを写しているものなど…カッコイイからカワイイまで、すべてをクリアしているものばかりだった。

「いつって…内緒撮りですよ、内緒撮り♪」

「内緒撮りって…盗撮だろ、盗撮!!　こんなん売りやがったら許さねえからな!」

キツと乱菊を睨んで、椅子に乱暴に腰を掛けなおした。興奮のあまりか、怒りのあまりか…いつの間にか立ち上がってしまったのだ。

「許さないって…もう売り出しちゃってますよ」

当然のようにその言葉を口にして、窓を覗く。

売り場を、この部屋から見える位置に移動させたのだ。

「はあ!？」

「絶対そう言われると思って、もう売り出してます」

先ほどまで山のようにあった日番谷の写真集は、もうほとんど無い。

「じゃあ何でさっき聞いたんだよ!？」

「ドッキリ、ってやつですよ、隊長♪ ホラホラ、そんなに怒らないで下さいって」

その瞬間、日番谷の血管が「ぷちっ」と音を立てたのは、言うまでも無いだろう。

何事も、あまり調子に乗りすぎてはいけないのだ。

日番谷の写真集は、それからしばらく在庫が無い状態が続いたそう
だ。

出版・販売が追いつかないことが度々あり、その人気の高さを辺りの死神にも知らしめ、十番隊を希望する新入隊員も一気に増加した。死神で日番谷を知らない人は、変な目で周りから見られていたという…。

写真集・第二号（後書き）

私が書いた小説を、多くの方々が読んでいるんだ…。
そう考えただけで本当に嬉しいです（^^*）

と！　　いうわけで…今回は皆様にアンケートを実施しようと思いま
す♪

詳しくはこちら↓<http://ameblo.jp/runak>
k/

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5327g/>

春の特別写真集

2010年10月8日11時17分発行